

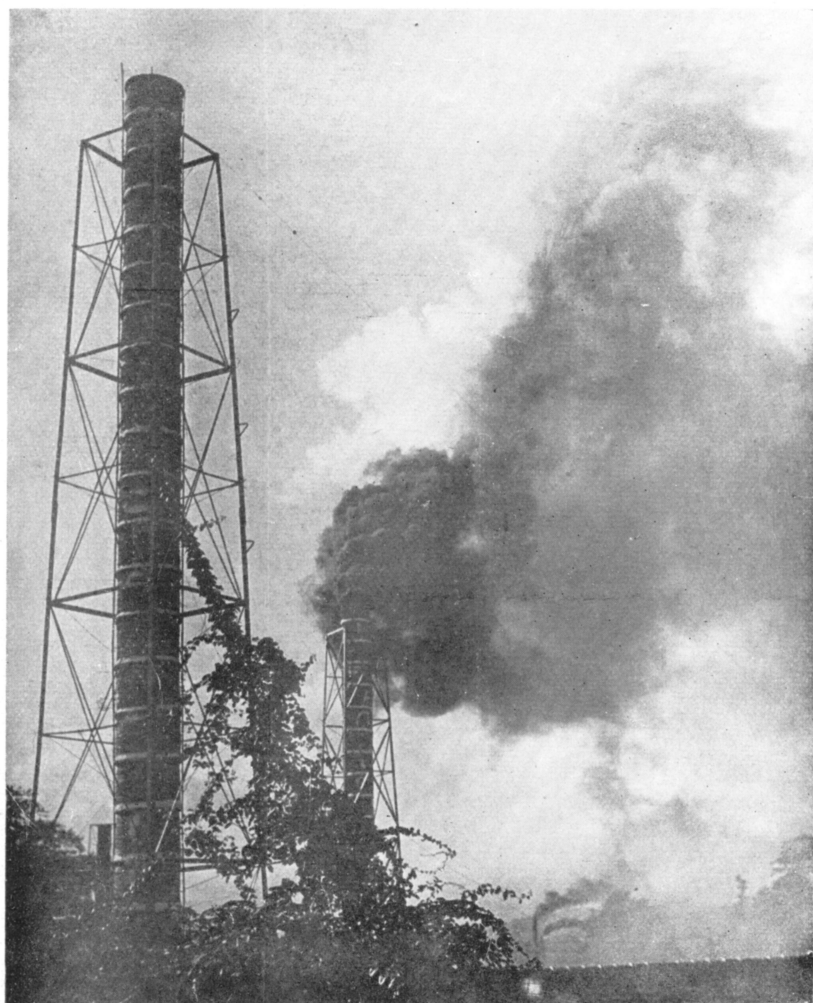
瀬戸讀本

類号	A261
書号	七

瀬戸讀本

瀬戸市教育會





序

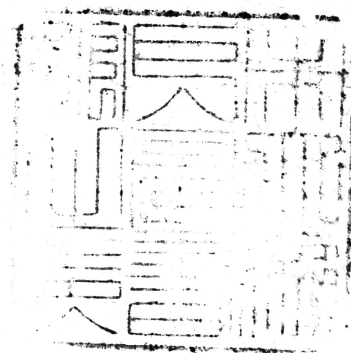
皆さんは、瀬戸市の可愛い子供である。瀬戸市の後をつぐべき何よりの寶であるから、瀬戸のことはよく知つておいていたゞきたい。否、よく知つて居るはずである。けれども、燈臺下暗しでまだ皆さんの知らないことも澤山あらう。この讀本を讀んで行くと「あゝ、さういふこともあるのか。」と教へられることが數多いと思ふ。そして瀬戸市に生れたことを有難く思ひ、祖先の苦心に感謝するにちがひない。

將來瀬戸市を榮えさせるのは、實に皆さんの力によるのである。瀬戸の良いところ足らないところをよく知つて、皆さんの力で瀬戸をますます良くするやうにして頂きたい。

昭和十四年九月

瀬戸市長

水野 憲 吾



瀬戸讀本

目次

一	瀬戸公園に登る	一
二	陶祖春慶翁	四
三	深川神社	九
四	陶都の生ひ立ち	二一
五	瀬戸驛の朝	一五
六	陶土採掘場を見る	一七
七	水道ものがたり	三二

八 焚き休む	二四
九 瀬戸便り(一)	二六
一〇 寺詣で	三三
一一 古老に聞く	三八
一二 瀬戸便り(二)	四三
一三 青果市場	四九
一四 磁祖民吉翁	五一
一五 瀬戸物祭	五八
一六 瀬戸氣質	六二
一七 瀬戸の四季	六三
一八 瀬戸市役所	六六

一九	轆轤と鑄込	六
二〇	光の中を歩む	七
二一	御野立所と萩御殿	七
二二	陶磁器館	七
二三	赤津焼	八
二四	瀬戸の一日	八
二五	忠魂碑	九
二六	瀬戸市の教育	九
二七	窯のいろ／＼	九
二八	古窯の話	九
二九	瀬戸物の瀬戸	一〇

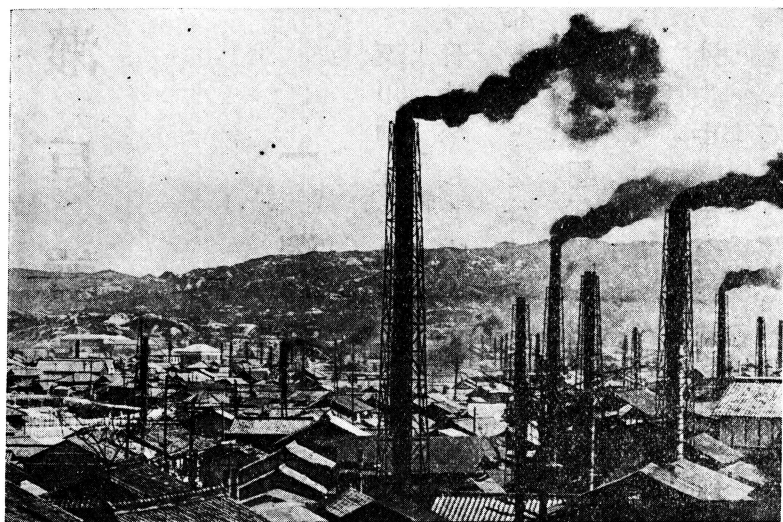
三〇 榮ゆく瀬戸	107
----------------	-----

瀬戸讀本

一 瀬戸公園に登る

深川神社に參拜してから瀬戸公園に登る。公園には櫻が多い。今日は珍しく空もよく晴れて、櫻も満開に近い。非常な人出だ。花と人とを分けるやうにして、やうやく陶祖春慶翁の碑の前に額づく。冥想めいさう暫し、七百年の昔を偲しのび、路を左にとつて頂上の展望臺に立つ。

見渡せば、ぎつしりと谷を埋める葦いらかの波、林立する無數の煙突、濛濛として空を蔽ふ黒煙、いかにも力強い吾が陶都産業の息吹いきぶきを感じ



瀬戸大観

じさせる。

市の中央を流れる瀬戸川に沿つた左右の大通りと、川に架けられた幾つもの橋は、本市産業交通の大動脈で、囂々^{がうく}と轟く車馬の音、工場工場で回轉する機械の響、或は自動車のけたゝましい警笛が、絶間なく入り亂れて聞えて来る。

藏所橋のあたりには、瀬戸川を挟んで市役所を始め、電話交換局、銀行、會社、商店、郵便局などの宏壯な建物が軒を連ね、其の

下手には陶磁器工業組合の事務所や、少し離れて警察の新廳舎などが、近代建築の美を誇るかのやうに際立つて見える。

近く右手に一段高く白堊の屋根は、深川・道泉の兩小學校で、西南遠くなだらかに起伏する翠^{みどり}の丘の懷に抱かれて、陶原小學校や窯業學校・陶磁器試驗所などの赤い屋根が美しく霞む。

更に遙か西方、瀬戸川の白い川原が霞と煙の彼方にとけるところ、一際大きく目立つのは陶生病院と高等女學校であらう。此のあたりには、近年製陶工場が次第に殖えて、大小の煙突が幾十百となく立竝んで盛に煙を吐いてゐる。これより西、郊外の一帯は廣廣として、田園よく開け、遙かに名古屋を望んで縹渺^{へうべう}とした濃尾の平原についてゐる。

轉じて東方を望めば、壯麗な寶泉寺の堂塔、綠樹の間に隱見し、其の彼方、猿投の高峯を背にして小高い丘の連なるあたり、立ち昇る

煙は赤津へ通ずる洞方面の工場であらう。

澄み切つた秋の日には、北方の空高く白雪を戴く靈峯御嶽の姿を望むことも出来るとのことだ。

二 陶祖春慶翁

今から凡そ七百年前、大和・伊勢・尾張・美濃と各地を巡り、良い陶土を探し求めて、瀬戸村にたどり着いた一人の旅人があつた。

此の旅人こそ、今日五萬市民から陶祖と崇め神と敬はれてゐる窯業界の大恩人加藤四郎左衛門景正、晩年剃髪して春慶と號した其の人である。

春慶翁は土御門天皇建仁三年大和の國に生れた。後山城の國深草に移つた。子供の時から遊ぶにも土器を造つては楽しんで

ゐたが、十七八歳の頃には自ら窯を築いて、其の製作に従事したほどであつた。

當時我が國の燒物はまだ釉藥を用ひない極めて幼稚なものしか出来なかつた。春慶翁は宋から輸入された精巧な陶器を見ては、何とかして彼の地の品に劣らぬ良い物を造つて見たいものだと日夜苦心を續けてゐた。

たまたま永平寺の開山道元禪師が宋の國に留學されることになつた。これを聞いた春慶翁は、此の好機を逸してはと思ひ、遙々九州にまで禪師を追ひ、是非彼の地へ同行されたいと頼んだ。禪師は異國に於ける修業の困難をいろいろ説き聞かせて、思ひ止まらせようとしたが、翁はどうしても初志を飜へさないもので、其の決心の強固なのに感じ、遂に従者として伴ふことを許した。

豫ねての志を遂げ、渡航船上の人となつた二十歳の青年工藝家

春慶翁の雄心燃ゆるが如き胸中は如何ばかりであつたらう。

宋に渡つた春慶翁は、先づ言語から學ばねばならなかつた。其の上製法の一部は極秘とされて、濫りに人の窺ふことを許されなかつたので、異國人でしかも言葉の不十分な翁は、寶の山に入りながら空しく涙を吞んで引返さねばならぬこともしばしばあつた。時には山に寝ね野に臥して難路もいとはず各地を遍歴し、或は一介の職人に身をやつして其の秘奥を探る等、なみ大抵の苦心ではなかつた。さうして脇目もふらず研究に研究を重ねること六年、漸く其の苦心は報いられ、其の技法を會得して歸朝の途に就いた。肥前に上陸した春慶翁は、直に窯を築いて宋から持ち歸つた陶土で小壺三箇を造り、其の一つを執權北條氏に、他の二箇を道元禪師に贈つたといふ。

さて、進歩した製法と精巧な技術を學んで歸つた春慶翁の前に

は、まだ一つの難關が横たはつてゐた。それは製陶に適した良土は容易に得られるものではなく、普く天下を遍歴して之を發見しなければならぬことである。これより春慶翁陶土行脚あんぎゃの旅が始まつたのである。

先づ、泉州堺を始めとして畿内の各地を巡歴したが、目的の良土は得られなかつた。軀やがて近江を経て伊勢に入り、桑名に窯を築いたがやはり心に叶はなかつたので、進んで尾張の知多郡に、或は愛知郡に、更に美濃方面にも轉じて試みたが、何れも其の土質に満足することが出来なかつた。

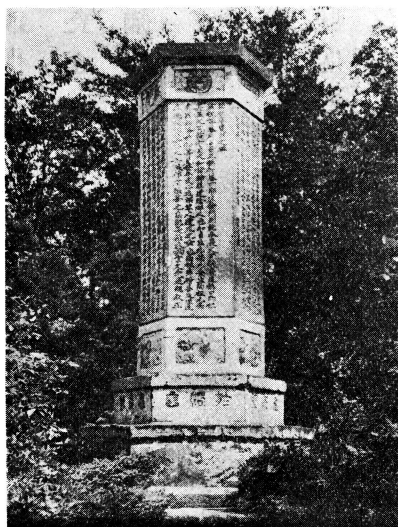
國を出て幾星霜、漸く瀬戸にたどり着いた春慶翁は、一目見るや此處の土に眼が輝いた。早速調べて見ると宋の祖母懷の土に全く似てゐたので、大いに喜び窯を開いて永住の地とした。

是より後も製作法に釉藥に益々研究を加へ考察を施して、廣く

同業者を教へ導き、所謂今日の瀬戸物の源を築き、八十三歳の天壽を全うされた。

今瀬戸公園に在る陶祖の碑は、慶應の頃其の功業を追慕して建てられたもので、市民は此の記念の地を俗に藤四郎山と呼んで居る。

明治十九年十一月、畏くも



陶祖碑

明治天皇は陶祖春慶翁の功績を嘉せられて、正五位を追贈遊ばされた。

郷土の人々も亦この偉大な恩恵に深く感謝し、深川神社の境内に祀つて陶彦社すえひこと稱し、朝夕詣でる人の絶間もなく、毎年四月十九日には盛大な祭典を舉げて其の偉業を永久に讃仰して居る。

三 深川神社

朝早く姉さんと深川神社に参つた。今度の支那事變が起つて出征される兄さんをこのお宮さまでお送りしてから、毎日兄さんの武運長久を祈ることに決めてゐる。拜殿の前でいつものやうに心をこめてお祈りをした。静まりかへつた境内に拍手の音がこだまして一入神々しい。やがて、日参團の人達が元氣な足どりで軍歌を歌ひながら石段を上つていらつしやる。先頭の日参團旗が、折からの朝風にひるがへつて清新な心持に打たれた。

朝飯をすましてから、お祖父さんに今参拜して來た深川神社に就いて、色々のお話をうかゝつた。

「深川神社の創立は、光仁天皇の御代寶龜二年と言はれてゐるが

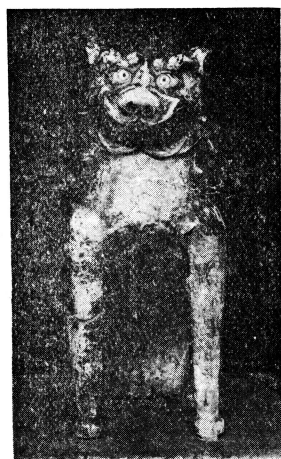
詳しいことはわからない。

延喜式神名帳といふ古い本には、早くから山田郡深川神社と記されてあり、他の本には、深川天神とか、瀬戸村八王子の社などと載せられてゐる。

祭神
天忍穗耳尊
天菩日命
天津彦根命
熊野樟豫昆命
活津彦根命
田霧姫命
市杵島姫命
活津毘賣命

祭神は天忍穗耳尊を始め八柱の神々を御祀りしたもので、毎年十月十五日はその例祭に當つてゐる。お祖父さんの若かつた頃は、馬の撓なまと言つて、華やかな馬具で飾られた數十頭の奉獻馬が、鈴の音も勇ましく繰り込んで來て、狭いあの馬場で向ふ鉢卷の若者達によつて、競馬が行はれた。時々奔馬が柵外に飛び出しては多くの見物人を驚かしたものだ。

今はこの床しい神事もいつしか廢れてしまつた。」と昔懷しげに話



國寶高麗狗

された。

お祖父さんは尙言葉をついで「國寶になつてゐる狛犬は七百年の昔、春慶翁が質のよい陶土を得るやうにと、深川神社に祈願をこめて祖母懷土を發見したので、其の御神徳に感じて翁が一對の狛犬を作つて寄進したのだと言はれてゐる。其の後惜しくも一は失はれたが、一は現存して瀬戸の誇となつてゐる。」と話して下さつた。

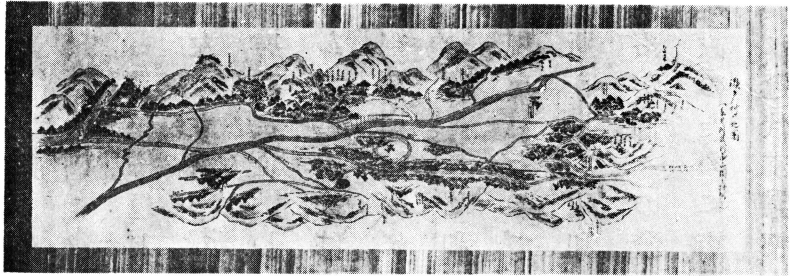
四 陶都の生ひ立ち

「瀬戸物の瀬戸」と世界に其の名を謳うたはれてゐる我が瀬戸市も、その昔は山峽やまかいに僅かに拓かれたさびしい邑里むらざとにすぎなかつた。けれども此の土地には、古文書の今に残されてゐるものが少いために、その發祥をはつきりと知る事が出来ぬ。たゞ延喜式神名帳

に、赤津の大目神社おほまと、舊市内の深川神社の二社が載せられてゐる事から、其の起原や先人の努力の跡を偲ぶより外に途がない。

又、今村や美濃之池も足利時代に松原下總守廣長が、赤津・本地と共に領して現在の寺山城趾にゐた事などに依つて、その昔を推定するより外はないやうである。

古い昔、瀬戸の地には四つの聚落があつて、それ等が次第に發達して來たものと考へられる。即ち舊瀬戸部落は初め郷洞に人が來り住んで窯焼を始めたのが、次第に南北の谷を拓いて今の南新谷みなみしんがひ、北新谷きたしんがひに伸びたもののやうである。又赤津部落は白坂・山路・北竈を中心^にに發達し、美濃之池今方面は松原氏の亡びてからは印場より瀬戸迄家なしとかゝれた書物もあるやうに、久しい間荒野で、僅かに寺山に慶昌院と八王子神社が、一しよに存してゐたにすぎなかつたらしい。



瀬戸古圖

又瀬戸市は江戸期になつてからは尾張藩に屬して、瀬戸村・今村・赤津村・美濃之池村の四邑に分かれてゐた。さうして明治時代になつて、山田郡が春日井郡と愛知郡に分けられたとき、春日井郡に編入せられ、明治十三年更に同郡が東西に二分された時、東春日井郡の管内におかれたのである。

明治二十二年十月一日、國內に自治制が布かれ、新しい市町村條例が發布されてこゝに瀬戸村として獨立し、明治二十五年一月町制を布いて今日の瀬戸市の礎石が置かれた。

今方面は從來美濃之池村・今村として發達して來たのが、瀬戸村と並んで八白やしろ村になり、

稻葉・三郷を含めた新しい形を作り上げたが、更に明治三十九年印場村・新居村と合して旭村となつた。然し赤津はその地形上などから常に一邑として存在してゐた。

大正十四年、瀬戸町が限りなき膨脹に、今後の進展と全町民の福利増進を企圖して其の地域擴張を唱へたとき、今美濃之池、赤津も喜んで之に加はり現在瀬戸市の外廓を築き、それから五ヶ年、産業に經濟に、教育に衛生施設に、あらゆる努力を傾けて其の面目は全く一新され、昭和四年十月一日、待望の市制は市民歡喜の裡に其の實現を見たのである。

斯うして昭和五年九月、都市計畫法が適用せられ、これ迄四つの聚落が、個々の發達を見せてゐた我が市も、茲に渾然一體、大瀬戸市建設のために市民一心の精進がつゞけられ、潑刺として伸び行く姿に、近代工業都市としての多望な將來が約束されてゐる。

五 瀬戸驛の朝

今朝、お父さんは商用で關西方面へ旅立たれた。僕は鞆を持って驛までお見送りに行つた。

朝が早いので人通りもまばらな縣道を、もう瀬戸物をぎつしり積んだ馬車が三四臺、車輪を軋きしませて勢よく通つて行く。大型トラックも物凄い勢で走る。瀬戸電バスも通る。やがて尾三バスも其の美しい車體を見せる。驛前廣場には客待ち顔のタクシ―が二三臺。

そろ／＼、人の動きも多くなる。

縣道沿ひの集荷場には、荷造りせられた陶磁器がうづ高く山のやうに積まれてゐる。俵になつてゐるのは恐らく粘土かガラス

粉であらう。

線路の兩側は貯炭場になつてゐて、ずっと續いて石炭の山。其の間を操車せられてゐる貨物列車は、やがて貨物の積込みにかゝるのであらう。人夫たちがしきりに右往左往してゐる。

やがて改札が始まつて、お父さんも車中の人となられた。發車する電車の窓にあるお父さんのにこ／＼顔に、さやうならをして歸路につく。そこへ高藏寺行の省營バスが、大きな車體を緩かに彈ませながら入つて來た。中央線方面行の客であらう、七八名の人が急いで乗り込んだ。

ポー、どこかの工場で仕事始めのサイレンが、勢よく鳴り響いた。

六 陶土採掘場を見る

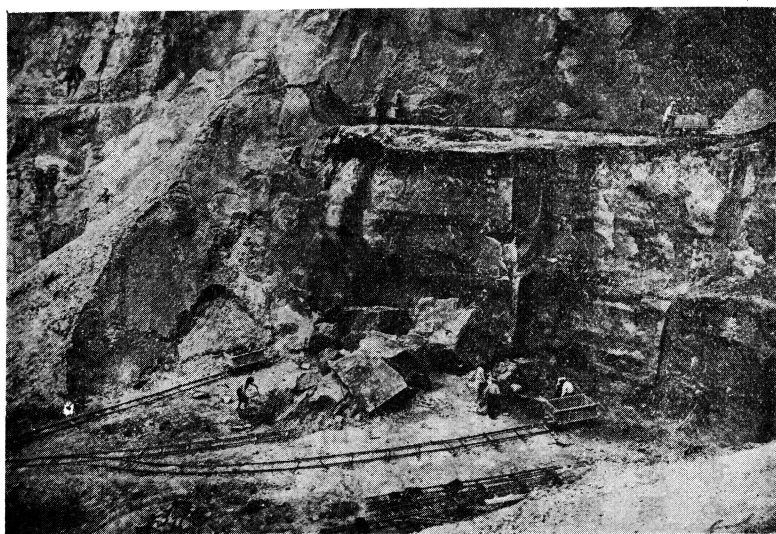
爪先上りの道をものゝ十五六分も歩いたらうか。黒ずんだ家並から漸く出はづれて、眼前がぱつと明るくなる。

雪が降つたのか、と錯覺さくかくを起しさうだ。見渡す限りの山々が、惜しげもなく純白の地肌もあらはに聳えてゐるではないか。

思はず小高い土山の一角に駈上る。かん／＼と照りつける眞夏の太陽の光は目に痛いほどだ。見ると右手に深く掘り下げられた廣大な窪み、縣營陶土採掘場の一部だ。三々五々小さく黒蟻のやうに働く人々、二條三條走るトロツコのレール、行き交ふ馬車、トラツクの群。撫順炭坑の露天掘――そんな感じが頭をかすめるともすると、崩れ落ちさうな細道を、駈けるやうにして現場へ下

り立つ。深さは四五十米もありうか、まるで掘鉢すりばちの底だ。四圍の絶壁に遮さへぎられて風は全くない。蒸されるやうな暑さだ。じり／＼と汗が流れる。思はず上衣を脱いで、親切おんなじな監督の説明を聞く。

白一色と思つた土も、間近によつて見ると、黒・白・淡墨・淡青とはつきり地層になつてゐる。地上から先づ二三十米は、ばらすを含んだ芻土で、急坂にあるのは之を運び去るトロツコの



掘 採 の 土 陶

レールだ。グリーンとモーターの唸りをたて、數臺のトロツコが上つて行く。

處によつて異なるが、刎土の下に大抵多少の亞炭の層があつて、この層の上下に陶土として最良の木節の層がある。木節にも色々あるが、此處に産するものは黒色で、層の厚さは凡そ二米ほどもある。その下の青味を帶んだ土が蛙目なのだ。

見るからに筋骨たくましい四五人の男が、殆ど素裸になつてその蛙目を掘つてゐる。長い柄のついた鶴嘴つるはしを振り上げる度に、鋭い刃先が白くきらりと光る。えいつと、力強い掛聲がかゝつて、打下された鶴嘴が、ぐんと地肌深く喰ひ込む。むり／＼と音を立て、じつとりと水氣を含んだ土塊が、ごろ／＼と崩れ落ちる。玉のやうな汗が、男たちの背といはず顔といはず、全身にかけてづると流れて落ちる。

かうして掘り出された土が、軀て瀬戸物となり、瀬戸市繁榮の源となるのだ。と思ふと、此處に働いてゐる人々の勞苦が、此の上もない貴いものに思はれて、ひとりでに頭が下つた。

掘り出された蛙目は、すぐさま馬車やトラツクに積込まれて、やがて製土工場へ運ばれるのだ。

聞くところによると、現在採掘しつゝある蛙目の下に、木節の層と、更にその下になんかなり厚い蛙目の層がある。さうしてこれ等の地層は、所によつて多少の厚薄はあるにしても、西へ北へどこまで擴つてゐる事か、先づ此處だけでも、瀬戸の陶土は無盡藏といつてよからうとの事だ。限りない喜びと頼もしさを感じつゝ、教へられた坂道を競馬場へと急いだ。

七 水道ものがたり

僕は猿投本谷の溪間に降つた雨の一滴である。多くの友達と共に楽しい歌を歌ひながら、急な谷川をしばらく流れて來ると堰堤に着いた。此處には、仲間のものが大勢休んでゐた。友達がこゝは上水道の取入場だと教へてくれた。

一休みしてから、眞暗な鐵管の内をしばらくぐぐり抜けて、ほと一息ついて邊を見ると、いつの間にか僕は赤津の東女郎前の着水井に着いてゐた。

此處で、猿投西谷の方からやつて來た友達と一緒になつて、休む間もなく又眞暗なコンクリートの管の中をくぐつたり、方形の水路の中を急立てられるやうに流れ下ること凡そ三〇〇米馬ヶ城

の谷川へ出た。

僕等は誰も彼も、よく晴れ渡つた青空を仰いで始めてほつとした。

此處からは、友達と別れ／＼になつて、せゝらぎの歌を口ずさみながら木の間／＼を縫つて、次第々々に低い方へと急いだ。

しばらく經つて、ふと氣が附いて見ると、何時の間にやら廣々とした池の中に流れこんでゐた。此處が馬ヶ城の貯水池だ。

邊を見ると、先に別れた友達も四方から集つて來た多くの仲間も、皆一緒になつて鏡のやうな水面に美しい緑の山影を映してゐる。

思へば、此處に集つてゐる僕等は、皆瀬戸市民の飲料水になつたり、いざといへば消火栓から噴出して火急の御用に立つのだ、と軽い誇を感じた。

それから十四五日経つて、今度は再び眞暗な鐵管の中を潜つて、三つの小さい池にそれぞれ分かれて入つた。これが濾過池といつて、僕等の體に着いてゐる垢や埃や其の他の不潔なものを洗ひ流してくれる所だ。

僕等は池の底に敷きつめた砂と、玉砂利の厚い層の中を潜り抜けて、すっかり垢を落すと、今度は鹽素で滅菌消毒されて見違へる程綺麗になつて出て來た。ほんたうにこれが僕自身だらうかと思ひ直す位である。

清々しい心持になつて鐵管を通り抜けると、今度は小高い所にある配水池に着いた。この池はいくつかの部屋に分かれて、その間をぐる／＼廻るやうになつてゐる。上は日光の直射を避ける爲に、すっかり蓋がせられて、その上に美しい芝さへ植ゑてある。僕ももうすっかり身仕度ができた。今は水道栓の開かれるの

を待つばかりである。

八 焚 き 休 む

焚き休むかまどの上や春の月

春めきし日和に咲くや歸り花

鋤に簍着せて午時喰ふ田植かな

植ゑぬ田はあたりに見えずかこひ苗

山影や日はありながら草の露

山寺の秋や見事に菜大根

秋風やどれも山越遊び友

小窯かせ雪の色をば焼いて見む

卓	如	茂	宜	道	黄	月	竹
池	水	堂	角	三	山	庭	有

たしなみし陶の手業をなし終へて

心易くもわれは逝くなり

春仙

祖母懷春雨

鈴木竹屋

孤松帶^ブ烟^ヲ處

春雨濕^ス鶯聲^ヲ

小立^{ラクテ}人懷^{ヘバ}古^ヲ

空傳^{クフノミ}祖母^ノ名^ヲ

馬城子規

山下^ニ白雲宿^リ

山上^ニ素月生^ル

蕭々^{タリ}馬城^ノ暮

只聽^ク子規^ノ聲^ヲ

中島秋月

秋風晚來起^リ

碧落淨娟^{ウシテタリ}々

忽出^{チツ}一痕^ノ月

皎然映^ズ兩川^ニ

雪中、窯烟

飛雪滿^{チテニ}天^ニ白^ク

窯烟匍^{フデヲ}地^ヲ昏^シ

朝來此、奇絶

陶法與^{ニカト}誰論^{ゼン}

九瀬戸便り

(一)

製土工場

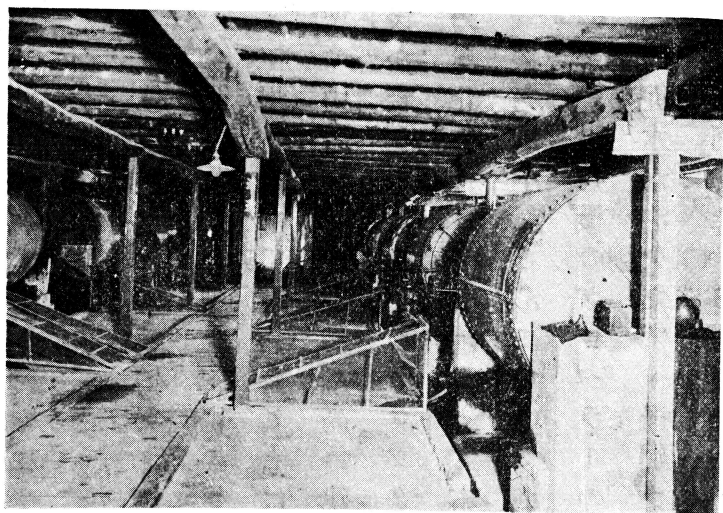
正雄君、御無沙汰しました。御達者ですか。僕は先日君に話した通り、一昨日瀬戸の伯父さんの所へ來ました。昨日は一日、從弟の宏一君と、深川神社や瀬戸公園、宏一君の學校などを見て歩きました。實際驚きました。何處へ行つても工場と煙突ばかりで、學校で習つた大阪市の事が頭に浮びました。家も屋根も電柱も、町

や神社に植ゑてある櫻や松やポプラの木まで、すっかり煙の爲に黒くすゝけてゐます。「さうだ、瀬戸で白いものは、人の齒と瀬戸川の水位だ。」といつて伯父さんが笑ひました。

今日は朝から製土工場の見學に出かけました。

工場へ入つて驚いたことは、通り路の兩側に堆高く積まれた土塊くれの山です。ずるぶん高い建物ですが、屋根裏にとゞくほどで、尙後から／＼と馬車やトラックで運ばれて來ます。これが花崗岩の風化した蛙目がじろめといふ土で、木節と共に主要な原料土ださうです。案内の小父さんについて小高い棚の上にと上ると、圓い大きな桶の中で飛行機のプロペラーの様なものが盛に回轉してゐます。白い泥水が泡をたてゝ搔廻されてゐます。木節きぶしや蛙目を水に溶かす攪拌機といふ器械ださうです。やがてこの白い泥水は、次のタンクへ自然に流れて行きます。こゝでは、小さい三角形の器の

いくつもついた長い調革が、緩かに上下に回轉してゐます。革の



ルメンロト

進むにつれてこの小さい器が、タンクの水底に沈澱してゐる砂を一杯づゝ丁寧に掲つて上つて行きます。やがてくると下へ下りる様になると、その砂を下の溜場へ、バサツ／＼と落して行きます。まるで小さいエレベーターです。見る見るうちにきれいな白い砂山が出来て行きます。以前はこの砂を厄介な不用物として、棄てるのにも困つた位ださうです。

が、今は大切なガラス製造の原料として、全国各地の工場に送り出されてゐます。

白い泥水は四角な樋の中を流れて、下の大きなタンクへ入れられます。タンクといふよりも、小さいプールといひたいほどです。十米に二十米もあるでせうか、深さは二米もあつて、若し僕等が落込んだらとても出られさうありません。泥水はこのタンクに凡そ一晝夜も止め置かれて、上の方の半ば澄んだところを取捨て、下の方の濃い部分だけを、ポンプで次の工場へ送るのです。

次の工場へ入ると、物凄い機械の音に思はず耳を蔽ひました。ガラ／＼ゴロ／＼、眞近で雷の鳴つてゐる通りです。それがひつきりなしですからたまりません、小父さんの説明もはつきりきゝとれない位です。見ると、直徑一米以上もあらうと思はれる鋼鐵製の圓筒形の機械が、横に三四臺並んで、互に音を競ふやうにして

回轉してゐます。これはトロンメルといふ機械で、やはり陶土に必要な長石又は普通さばといはれてゐる珪石と長石の混つた小砂利等を粉碎するものださうです。あの物凄い音は、この圓筒の中に拳大の非常に硬い丸石が半分ほど入れられてゐるからです。さうして其の中へ、長石やさばを適量の水と一緒に入れ、それを電力で回轉させるのです。その中に、長石やさばなどはすつかり打ちくだかれ、乳狀の泥水となつて了ふのです。

この泥水と、先に木節・蛙目から出來た泥水とを、適當の割合に混合して、再び攪拌機にかけるのださうです。丁度トロンメルの眞下のところに見覚えのある攪拌機が盛に回轉してゐました。

ほどよく混合された泥水は、壓搾ポンプによつてプレスといふ器械にかけられます。プレスといふのは、先づ寫眞機の蛇腹を大きく長くした様なものと思つたらいいでせう。その山と山との

間に小さい穴のついた鐵板が一枚づゝはさまれてゐて、中央の圓い大穴から泥水が、恐しい力で押し込まれるわけです。従つて水分だけが鐵板の小穴からもれて出るわけですが、たくさんのごとですからまるで大夕立のやうです。やがて器械が取はづされると、大きな土の煎餅が何枚も出來てゐます。

この土の煎餅を更に土練機といふ機械にかけて、充分練ると初めて、陶磁器を製造する土となるのださうです。

僕は陶磁器を造る土は、直接山から出るものとばかり思つてゐたのですから、本當によい學問になつたと思ひました。同封した寫眞は、この工場の内部を撮つたのです。二三日のうちには、製陶工場を見學するつもりです。又何れお知らせするでせう。次郎君や幸三君によろしく。

月 日

英 二

正雄君

一〇 寺詣で

お性空様

宗派 曹洞宗
祖師 天鷹祖祐
禪師

今日はお性空様だ。友達と雲興寺へ参詣に行く。盗難除けの御札様を迎へる人で寺の庭はごつたがへして居る。門前でお客をまつ自動車の間をくゞつて性空石しやうくうを見る。

此の寺にはこんな物語が傳へられてゐる。

昔寺の後の毘沙門山中に怪しい者が住つて、人々に害を加へた。或時、住持の天先和尚はんから般若性空にやの理を解き聞かせられた。彼は遂に法力を得て大いに喜んで、「師弟の縁を結び給はゞ、永く此の山を護り里人を安んぜん。」と誓つた。

師は之に性空の法名を授けられたが、後石に化して此の寺

を護つた。其の後此の寺

に盗人が入つて物を盗む

とたちどころに氣が狂つ

て門内を彼方此方とうろ

つき廻り、どうしても境内

から立ち出ることが出来

なかつた。そこで盗人は

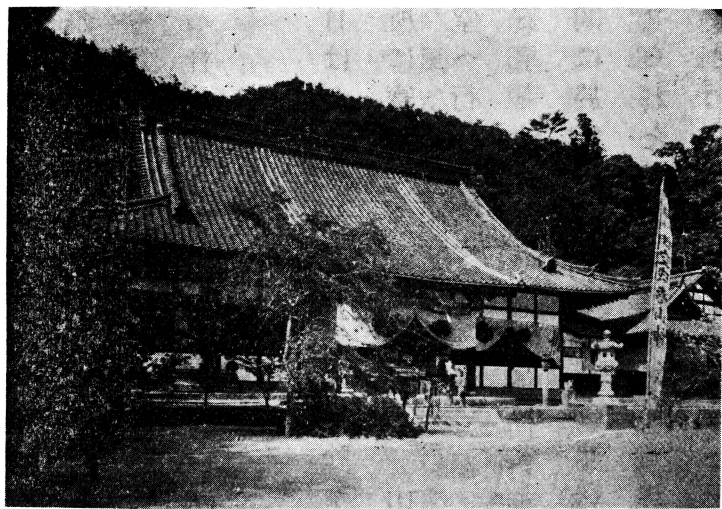
佛に物を返し罪をわびて

始めて門外に出ることが

出来た。

里人の家でも此の性空様

に護られて、盗難がたえて



寺 興 雲

なかつたといふことから、これを性空山神と崇め、今も尙其の靈驗を讃仰してゐる。(四月二十五日)

雲に寝て衣のしめる月夜哉

士朗

御精靈祭

今日は七夕である。お墓掃除をすつかり済ましてから、家の者と一所に寶泉寺の靈祭^{たままつり}に行く。山門をくぐつて本堂に參詣して、納骨堂へ行く。

寶泉寺は曹洞宗雲興寺の末寺で、後桃園天皇の御宇、安永年間^{せうあん}に於て、雲興寺二十九世華嶽^{くわたく}層雲^{そうん}和尚^{くわんじやう}を勸請して、開山とせられたもので、延命地藏菩薩を本尊とし、山號を大昌山といふ。

有名な行基菩薩作の藥師如來の像も本堂に祀られてゐる。

當寺には、又春慶作の准國寶といはれる神酒壺一對が藏せられてゐるのも博く世に知られてゐるところである。

毎年十一月八日、十二日には、俗に八日薬師、十二薬師といはれて、薬師如來の祭典が営まれ、参詣の老若男女で雑沓し、門前飴屋の市になるのも面白い。(七月七日)

風が吹く佛來給ふけはひあり
虚子

お立待ち

暑い日も暮れて、街の打水に灯影がまたゝきだす。支那事變に出征せられたお隣の陶男さんの武運長久を祈るお立待ちの仲間に入れてもらふ。先づ深川神社に参拜して、それから萬徳寺まで行く。本堂にお詣りしてから、最近造られた太子堂に参詣する。

宗派
眞宗高田派
祖師 海圓上人

大坂四天王寺
河内叡福寺

太子堂は鎌倉時代の建築様式の粹^{すゐ}を聚^{あつ}めたもので、其の構造は鎌倉の寺院にも劣らぬといふ事である。御本尊の聖徳太子の御木像は、太子の御直作といはれ、今村城主松原氏の寄進にかゝり、日本三太子の一であるといふ。

寺は眞宗高田派で、親鸞聖人が、日本佛教の開祖として太子の像を各地の寺に祀られた事から、この寺と太子とに因縁が結ばれたといはれてゐる。

門前にも寺内にも、居待^{まを}の人の波は押し合ひ、道端の釣行^{つあん}燈^{どん}の灯も美しい漫畫にてり映えて、短い夏の夜は更けやすい。

東の空がぼうと明るくなる。月の出も間近い事であらう。

(舊八月二十二日)

立待月咄^{はな}すほどなくさしにけり

青 畝

秋 葉 祭

御堂の中で、山伏姿の修驗者しゆげんじやによつて、供養護摩くやうごまが修しゆせられる。

天井から吊された御幣みひの、火に煽あふられるのも凄まじい。やがて、其の火を松明たいまつに移して、行者は供を引具ひきぐして厳いかにしく堂外に出る。

境内の中央には、大きな注目しゆめ綱なはがはりめぐらされて、松丸太や粗そ朶だ柴さいなどが堆うづ高くつまれてゐる。

修驗者は、八方から火を點じ八大龍王を勸請くんきやうして、鎮護國家・惡魔降伏じゆもんの呪文じゆもんも高らかに大火燒たいかしやうの祕法ひぽうを修める。

燃え盛る火焰は、風に煽られて物凄ものぢやういばかりである。

修驗者の火わたりが終ると、參詣の人々も我先にと火の中を渡り始める。僕も皆につりこまれてこはくと眞赤に焼ける火の上を慌あはてゝ渡つて見た。が、少しも熱さを感じなかつた。我にか

へつてあたりを見渡すと、廣い境内には參詣の人が後から後からつめかけて来る。

父と一緒に慶昌院で加持祈禱を授かつて、火除けの松明を戴いて歸つた。(十二月十六日)

火祭や焰の中を鉾進む
虚子

一一 古老に聞く

瀬戸の地名が歴史上に記録されてゐる中で、一番古いのは和名抄に山田郡主惠の郷と書かれてゐるのであらう。

そして「大嘗祭にはいつも尾張國所産の甕以下十六種を献ず。」と祭式にかゝれてゐる所から、瀬戸が陶所すえとから始つたといふ話も一理はある。

又瀬戸といふのは、「狹まる所、四方に山ありて海迫る所。」と言ふ書き物から、追戸から變化したといはれてゐるのも面白い。

赤津なども古い書き物には飽津と記されてゐて、赤土の變化とも、又附近に海上（愛知郡地内）といふ地名のあることや、猿投山中に古代の貝の化石や、古い窯跡の發見されることなどから、その昔海であつたとも言はれてゐる。

古い頃、私共の町は品野へ通ずる印所道、水野へ抜ける乗越道、三河路から信州に通じた南新谷や、舊山口街道、舊本地街道が主要な道路で、そこを小荷駄馬が、振分けに荷物をつけたり人を乗せて、長い手綱の馬子が唄ふ追分唄に、嘶く聲ものどかに往來したものである。追分などの地名も古い驛傳の制の名残と見てよからう。

又瀬戸が尾張藩に屬して代官所が水野にあつた關係上、此の方面に陣屋・碓・十三塚などの地名が残つてゐるのにも昔が偲ばれ、經

塚(祖母懷校北)五位塚(紺屋田池附近)などは、いづれも春慶翁に因縁が深く、一里塚は昔の道路元標の名残として名のみ残つてゐるのも亦懐しい。

尙地名で其の起原の知られるのは、雨池(祖母懷蓮池)吉田(葦田)清水田などで、それらが、ごく近頃まで池であつたり、美しく蓮の花咲く沼地であつたり、また一面の田圃であつたりしたことは誰でもよく知つてゐるところであらう。

又寺山が寺領を意味し、市場が織田時代からの交易の官許の地であつたのや、祖母懷御用門が陶祖磁祖に關係が深く、新開地・新道・茨北新谷・南新谷郷・洞・北竈など、其の名に起原の偲ばれるのも面白い。

人名で多い加藤・伊藤・松原・稻垣・水野などの姓は、それぞれ古いもので、其の人達は皆名字帶刀の一族であつた。加藤姓は陶祖・磁祖

の世襲制の後と見られるし、次第に少い伊藤氏も、瀬戸織部の祖から残つた一族であり、水野氏は水野からの移住者といはれ、松原氏が今村城主の流れと見られ、殊に赤津に多く見られてゐるのも、廣長が品野城主と安土坂に戦つて敗れ、赤津にのがれて土着した事に由來し、稻垣氏が松原氏家臣の一統と言はれてゐるのも正しいことであらう。

今村城主としての松原氏は、足利の頃、赤津・今村・本地を所領し、今の八王子社の地域に住して約三百年。今も其の堀跡は立派に原形が遺つてをり、赤津の松原塚がその墓所であり、萬徳寺の菩提所であることはよく人に知られてゐる所である。

歴史上有名な人達で瀬戸市に深い関係をもつてゐるのは、寺々の佛像の作者に、聖徳太子・鳥佛師・行基えしん・恵心僧都そうづがあり、佛畫に狩野元信・土佐光信、神社に信長、寺院の寄進に足利義滿・織田信秀・徳川家

康・豊臣秀吉・淀君などの名が散見されるのは、瀬戸の昔を偲ぶには最も重要な事実と謂はねばならぬ。

一二 瀬戸便り (二)

製陶工場

御手紙ありがたう。御無事ださうで何よりだね。

今日は製陶工場を見學したから早速お知らせしよう。

工場は瀬戸市の郊外にあつて敷地は三百米四方もあらう。當市でも有數の大工場だ。門を入つて事務所を訪れると、事務員の小父さんが快く案内して下さつた。

第一の工場は製土場だ。これは先日お知らせしたのと殆ど變

りはない。例によつて物凄しい音をたて、トロンメルが回轉してゐる。

第二工場、こゝが面白い。窓際に方一米位の臺を並べて、一臺に一人づつ十人ばかりの職工が仕事に餘念がない。

邪魔にならぬやうに側に近よつて見ると、臺の中ほどに電力で回轉する轆轤ろくろがある。それ／＼石膏で拵へたお正月のお飾りの様な形をした型をのせ、生煎餅の様に薄く切られた土がしつかり押さへつけられる。轆轤は回轉する。其の上へハンドルを下げて外鋲そとこてを當てるのだ。つまり石膏の型で皿の内側が出来、外鋲で皿の外側の形が出来るわけだ。實に手馴れたもので面白い程わけなく出来る。出来た皿は傍の長い板の上に次から次へと二列に並べられる。一杯になるとすぐ隣にある押入のやうな乾燥部屋へ運ばれる。

次は鑄込場だ。やはり十人程の人が忙しさに働いてゐる。石膏で出来た丸いやうな四角なやうなちよつと何が出来るか見當もとれぬ型を、五六個乃至十數個を並べてしつかりゴムバンドでしぱりつけてある。其の中へ側の桶の中から乳狀になつた泥を如露のやうな器に汲み取つて流し込む。ものゝ五六分もたつと型の中に残つた泥を桶へあける。さうして、型を分解すると、出て来る、土瓶が、花瓶が、或は砂糖入が。思はず見とれてしまふ。

宏一君にうながされて次の工場へ急ぐ。驚いたことには、あ



込 鑄

りの棚といふ棚に、並べられた數知れぬ素焼の製品だ。氣をつけぬと袖に觸れて落しさうだ。素焼窯が二三基ある。餘り大きくはない。二米に三米位のものだ。こちらでは乾燥した皿や茶碗の窯詰だ。向ふでは已に素焼を終つて窯から出して居る。窓際では今盛んに釉藥が塗られてゐる。白い液體の入つてゐる桶の中へ素焼されたものをずぶりとつけるのだ。何のこともないやうに無雜作に行はれてゐるが、然し相當の熟練を要するさうだ。

いよゝゝ釉藥がぬられると本窯に入れる。本窯は流石に大きい。直徑凡そ五米高さは二米位、見上げるやうな圓窯だ。

見渡すとそんな窯が三つ四つ立ち並んでゐる。成程大きい工場だと肯かれる。製品は俗にえんごろといはれる匣鉢さきへつめられる。數人の職工がその匣鉢を自分の背だけ以上も積み重ねて、窯

の中へ次々に運ぶ。窯の中にはぎつしりと一分の隙間もないほど行儀よく積まれる。一杯になると焼手によつて火が入れられ



動力機

る。此の窯を焼くと言ふ仕事は大變に大事な仕事で、一旦火を入れたが最後、凡そ五十五時間不眠不休で石炭をたかねばならず、費用の點から言つても今までにかゝつた經費よりも、これからの石炭代の方が遙かに多い。一窯焼き上げるのに、約一萬七千斤を要するとの事だ。その火加減も非常に熟練の要るもので、之によつて製品の出来不出来が分れるとの事だ。

本焼が終ると窯起しと言つて、まだ相當溫みのある製品を窯か

ら取出す。匣鉢の中をのぞくと、「あの素焼の茶碗が……」と思はれるほど純白な艶々しい茶碗に變つてゐる。それに面白いのは同じ窯から色々な物が焼けて出て來ることだ。廣い工場の中も製品と匣鉢の山で身動きもならない程だ。その間をあちこちと働くと大勢の職工、それに蒸されるやうな窯の餘熱。急いで次の工場へ移る。

此處は畫工場。思はずほつとする位靜かで落着いてゐる。色鮮かな製品の中で、きれいな見本を前に繪附けの最中だ。上繪附にも色々の方法がある。轉寫・ゴム判・霧吹等のやうな機械的のものもあれば、繪筆をとつて描く方法もある。僕等はやはりこの方に思はず足を引きつけられる。ガラス板の上に油繪に似た繪具をおいて、油でこねては、風景・靜物・花鳥・人物と自由自在に描かれる。實に見事なものだ。

上繪附がすむと今一度繪附窯で焼くのださうだ。長いトンネルの様な窯で、其の中をレールが通つてゐる。金網張りの車に品物を一杯積込んで、順次窯の中へ送り込むのだ。七時間位焼いて出口へ出る頃には、完全な製品になつてゐるさうだ。

出來上つた製品は、いよゝ最後に選別場に送られる。荷造場では大勢の男工・女工が、包装に箱詰にと、とても忙しい。「先づ大體こんな順序になつてゐます。」と小父さんは額の汗を拭つて、僕等を二階の涼しい陳列所へ案内された。冷たいコーヒーをいたゞきながら、目の覺める様な製品について尙も説明をきいた。

僕は是非君にも一度見せたいものだといふ／＼思つた。「折角來て下さつたから。」とこの工場で出來たきれいな湯吞と、繪葉書とをいたゞいた。君にもお分けするつもりだ。待つて居たまへ。

月 日

英 二

正雄 君

二三 青果市場

市場の朝は騒々しい。せり市の始まるのも間近であらう。

山と青物をつんだ荷車、リヤカーを引いた人、自轉車、オート三輪車に乗った人、男女、賣る人、買ふ人、何れも息をはづましながら駈けるやうにして入つて行く。そこへトラックが二臺、野菜や果物を積んで入つて來た。名古屋からの入荷であらう。

中へ入つて見ると、場内右側の陳列臺には秋の味覺をそゝる梨・柿・栗、箱詰にした無花果・葡萄等が幾山となく盛られてゐる。

中央の廣い土間には大根・牛蒡・甘藷・白菜等の野菜類から、生魚・鮭・鱒等の塩物類、乾物・漬物等に至るまで、足の踏場もない程一面に擴げられてゐる。これだけ多くのものが毎日市内で消費されるか

と思ふと、ほんたうにびつくりする。

やがて大勢の人々がどつと押しかけて、品物の前に黒山を築いた。と、威勢のよい市が始まつた。販賣係の張りあげる大聲に應じて、口々に叫ぶ聲、思ひ／＼に出す手、騒然と入り亂れてまるで喚聲の湧き立つやう。僕等が見てゐては何程で賣買されたのか一向分らない。が、馴れた販賣係の落着き拂つて買主を定めて賣値と共に記帳して行く手際のよさには全く感心させられる。品物の山は次々にかうして賣捌かれて行く。之等はやがて市内の八百屋の店頭にかざられて、市民の手に渡つていくのである。

聞けば野菜・果物類は市の近郷を始め遠く海部・中島郡方面、或は碧海・寶飯郡方面から入荷せられ、海産物は熱田・下之一色・三谷等の魚市場から送られて来る。さうして此の市場を経て全市に於て消費せられる食料品は、實に年額約四五十萬圓の巨額に上るとい

ふことである。

△一四 磁祖民吉翁

焼物師民吉の家

○

品「さあ皆さん、珍しうはなけれど、けふの心祝ひに搗いた餅一つあがつて下され。」

卯兵衛「や、これは忝けない、その祝ひ餅喰はうとて私達はいつの昔から待ち焦れてゐたか知れぬ。なあ、直右衛門。」

直右衛門「全くぢや、有田や平戸の石焼が羨ましい、瀬戸にもあゝいふ物が焼けたら土地の衰微も取返せるものと幾代前から羨んでゐたか知れぬ、それが瀬戸民吉殿のお蔭で此の祝ひ餅に

有附けたのぢや、さア皆祝うて馳走になれ、瀬戸はこれから繁昌するぞ。」

藤七「俺は持つて戻つてあやかるとやうに家中のものに分けてやる。」

彌右衛門「私は子澤山で家内が多い、御無禮ながら二つ貰ひます。」
品「餅はたと搗いてある、遠慮なうなんぼうでも持つて歸つて下され。」

女房一「お品殿、嘸嬉しいこととでござらうな。」

品「あい、長い年月留守を預かつた、言ふに言はれぬ苦勞も何所へやら、一時に消えてなうなりました、ほゝゝゝゝ。」

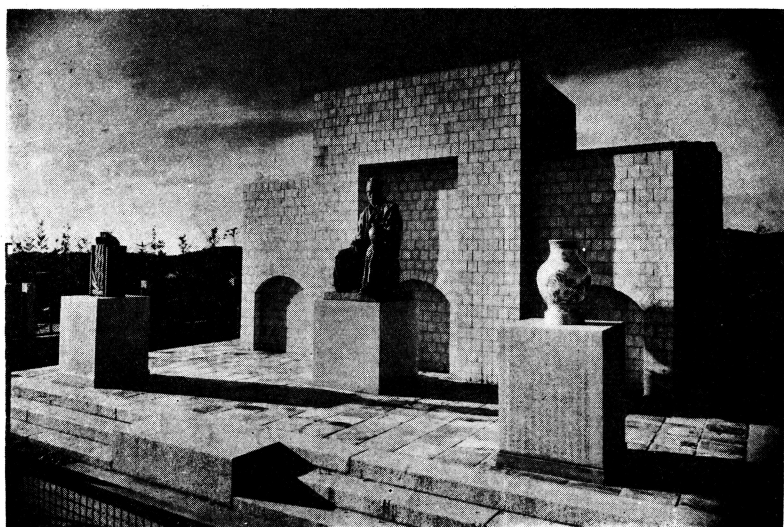
卯兵衛「さうとて、何にせえ、献上の香爐は納まる、けふはまた改めてお城へお呼び出し、殿様へお目見得と云ふのぢやもの、昔は知らず私等の代、いや私等の先祖代々の方、こんな譽れなこと

は今が始めてぢや。」

富右衛門「庄屋の唐左衛門殿も民吉殿を正客にして、瀬戸村總がゝりの大振舞ひをせにやならんと言うてゐられたぞ。」

藤七「初代藤四郎様のお祭と一緒にするのぢやな、瀬戸中ひつくり返るやうな騒ぎをやつてな、はゝゝゝ。」

久米八「さあ、皆出迎ひぢや出



磁祖銅像

迎ひぢや、お代官がお附添ひで、民吉殿は立派に大小を差してもう直き村の口へかゝられるぞ。」

品「まあ、民吉殿が大小をさして。」

惣作「それぢや親かつさん、噂のあつたごと、名字、帶刀御免になんなはつたに違ひない。文吉、こんな嬉しいことはないのう。」

文吉「嬉しい所の騒ぎぢやねエ。俺ア嬉しくつて、涙がこぼれらア。」

俺もかうしちやゐられねえ、惣作あとを頼んだぞ。」

惣作「待て、御代官も御一緒なら、そこらほそめて、庭も掃かにやならん、行つちやならんぞ。」

文吉「成る程、親方の威勢のいゝ所を見てえが、仕方がねえ。」

民吉代官水野權平を案内して入り来る

民吉（大勢に向つて）これでは餘り恐れ入ります、まるで「御檢分」の出迎

ひか、お祭りのお練りでもあるやうな。もう／＼どうぞ引取つて下さりませ。」

卯兵衛 「なんの／＼村中は祭どころの喜びぢやない、さア行かつしやい／＼。」

民吉 「では旦那様穢苦しうございますが。

權平はにこやかに首肯いて先に立つ。

皆續いてどや／＼と内に入る

さて御代官様、今日殿様お目見得首尾よく相濟み、民吉一代の面目を施しましたるは皆旦那様のお蔭、何とお禮の申陳べやうもござりませぬ。」

權平 「何の／＼、これも皆其方そなたが命をかけた數年間の苦心の賜物、嘸満足なことであらう。皆もよふ聞け、忝けなくも大納言様には今日御城内御深井の御茶屋に於て、民吉にお目見得をゆるさ

れ先日獻上の香爐を平戸有田乃至南京焼にもまさる名作と殊の外御賞美あつて、以後民吉工夫の石焼を染附焼と稱なづけるとの御誕、御褒美として御庭焼御用の上釉に金一封を下し置かれ、尙その上に加藤民吉保賢と名字帶刀を御免になつた。

民吉「これがお目録でござります。」

目録を皆に見せる。

權平「その節民吉より願ひあげ、古來瀬戸土焼の本窯は一子相傳ふゆゑ次男三男の出世の途なく、現に民吉自身も熱田、前の新田に馴れぬ百姓となつて働く所を御奉行津金文左衛門殿の情によつて南京焼の仕法を覚え、それが原にて此度の新窯の工夫と相成つた、ついては今後染附焼所望の者には民吉の鑑識次第製法を傳授し、何者も新規窯持ちとなられるやうお許しを蒙らば自然この道繁昌しお國益の一つとも相成りませうかとの願ひ、

殿には至極と思召され、即座に御免許あつて日本は愚か異國までも瀬戸名物染附焼の名を廣めよとの御懇のお言葉を賜はつた。」

卯兵衛 「では何者でも新窯を焼出すことが出来るのでござりますか。」

直右衛門 「土焼から石焼に更ることも出来るのでござりませうか。」

權平 「如何にも、唯ひとへに瀬戸の繁昌を圖ると言ふが民吉の願ひなのぢや。」

民吉 「皆様、瀬戸を日本一の瀬戸にするにはこれからでござります。足かけ六年以前皆様にお約束申した石焼の秘法を漸く會得して戻つたとは申すものの、土地が更れば土も變り釉が違へ



磁祖作花瓶

ば上りも違ひます、工夫はこれから、それを仕遂げるのが皆様の
お力でござりますぞ。」

卯兵衛 「忝けない、民吉殿。皆に代つて私からお禮を申します。

瀬戸は全くこなたの力で蘇^{よみ}生^{がへ}る、土焼・石焼ばつと世間へ賣廣め
たら、唐津々々と云ひならはした焼物の稱をやがて瀬戸物々々
々といひかへるやうになりませうぞえ。」

（大森痴雪作 明暗線染附に據る）

一五 瀬戸物祭

昨日の雨はからりと晴れた。今日は瀬戸物祭だ。日頃濛々た
る煤煙に明け暮れる我が郷土の空も、さすがに晴々として明るい。
學校から先生に連れられて、窯神社の參拜にいく。今神前では



形人のもとせ

嚴かな祭典が行はれてゐる。山上に聳え立つ磁祖の銅像も思ひなしか微笑みかけてゐるやうであつた。

家へ歸つてから弟を連れてお祭見物に出掛ける。瀬戸驛前から深川神社の方へかけて瀬戸川沿ひの大通りは、黄ばんだ街路樹の間々に美しく雪洞ほんほりが飾られてお祭氣分をそゝる。

丁度人の出盛りで路上は身動きもならない程の雑沓だ。道端にぎつしりと立竝んだ瀬戸物の

廉賣店には、あらゆる種類の焼物がうづ高く積まれて、色とりどりの秋の陽を一ぱいに浴びて快い色彩を強く反射してゐる。街路のいもを洗ふやうな混雑、客呼ぶ商人の甲高い聲、それに入り交つて絶えず品物のかち合ふ音。人出は益々多く、交錯する雑音は愈々騒々しい。

人の波にもまれながら進むと、やがて名物瀬戸物人形の前へ出る。今年は人形も支那事變に因んだ戦争物が多く、豪快な爆撃や勇壯な白兵戦等の場面には思はず拳を握らせられた。よく見ると、人形は何れも小さな焼物の形と色とを巧みに取り合せ、意匠を凝らして造られてゐる。如何にも精妙なものである。僕は其の一つ一つに興味深く見物してから陶彦社に参拜し、妹への土産を買つて歸路についた。

一六 瀬戸氣質かたぎ

花の雲鐘は上野か淺草か。

江戸時代二百六十餘年、將軍家の城下町として江戸は、打ちつづく太平に花の都の翳かげも高く繁華の誇を恣ほしにした。自然人々の風格氣質などにもそこに特殊の相すがたを見せて、所謂江戸兒氣質を成したのである。

我が陶都は、本邦陶磁器の本場として土焼く煙の歴史一千年、時に消長はあつても窯窯の火の町の景氣は、人を呼び物を寄せて殷盛を誇ることに久しく、こゝに一種獨特の瀬戸兒氣質は生まれて、何處か一脈江戸兒氣分に通ずる所があつたのかも知れない、何時しか「瀬戸は火の町、尾張のお江戸。」とさへうたはれるやうになつた。さうして、其の風俗習慣に或は人情氣風に、今に至るまで何かしら

特別の風趣を有つかのやうでもある。

凡そ人質民性は其の土地に卽して永い傳統と歴史の間に育まれるもので、固より一朝一夕の所産ではない。其の由つて來る所遠く且つ深いものがあり、其の間概ね種々の長短利弊の伴ふことを免れない。我等は常に父祖傳統の強く正しい瀬戸兒魂に培つて益々其の本領を發揮し、清醇な人情美を保持すると共に、一面深い省察を加へて其の短を補ふことに努め、昭和の瀬戸人としての十全の美を濟すことを期しなくてはならない。

一七 瀬戸の四季

○

家々の裏屋根に残りし斑雪まだらゆきの消えさりしも、つひ此の頃と思ひしに、いつしか瀬戸川の水ぬるみて、磧かはらの草もやうやく崩え初めた

り。

乾しならべたる陶器すえものの上に陽炎のゆらぎて、土捏ねる手も自ら快し。

藤四郎山・陶彦社など、花だよりの人々の口に上りて、春漸く酣なり。

陶彦社に詣づれば、境内の櫻一片二片、石のきぎはしの上に散りかゝりて、夜は花見る人の其處此處に集る。

やがて四月も半ばを過ぎぬれば、藤四郎祭も近づきて、子供獅子の鈴の音は巷に祭のうれしさを撒き散らす。

○

街路樹の葉裏白々とひるがへりて、梢をわたる初夏の風いと爽かなり。

瀬戸も稍々青みがゝりて、萌ゆる若葉の中より赤土色の煙突の

きはだちて立てるは殊に美し。

いつしか眞夏ともなれば晝の暑さにひきかへて、夜は境内に立ちならぶ夜店の灯影も涼しく、宮前橋の上は月影川波に碎けて、こゝばかりは川の濁もなく、又暑さもなし。

夏の夜空に、窯焼く火の赤々と燃えて、床臺に夕涼む人々の顔に照り映ゆ。

萬徳寺の御太子まつりも過ぎて、やがて秋も近づけばいつしか蟬の聲も細り行く。

○

秋はせともの祭にはじまる。

九月も半、せともの市の前は人の渦、賣る聲買ふ聲に暑さ未だ残りて額も汗ばむ程なるに、陽ざしやゝ黄ばみてさすがに秋も近づけり。

朝まだきいろふ粘土にもやゝ冷たさを覺えて、積み壞れしえん
ごろの陰に鳴く蟋蟀の聲にやうやく秋も深みゆく。

街には鶉鷓等秋の小鳥の吊されたるも見えて、秋風の巷をわた
る頃には窯の火もなつかしく、深川神社の祭も過ぎて寶泉寺の八
日薬師も近し。



窯起しの陶器の溫もりなつかしき頃ともなれば、瀬戸川の水あ
せて、人の足音もいと寒々と身に泌みわたる。

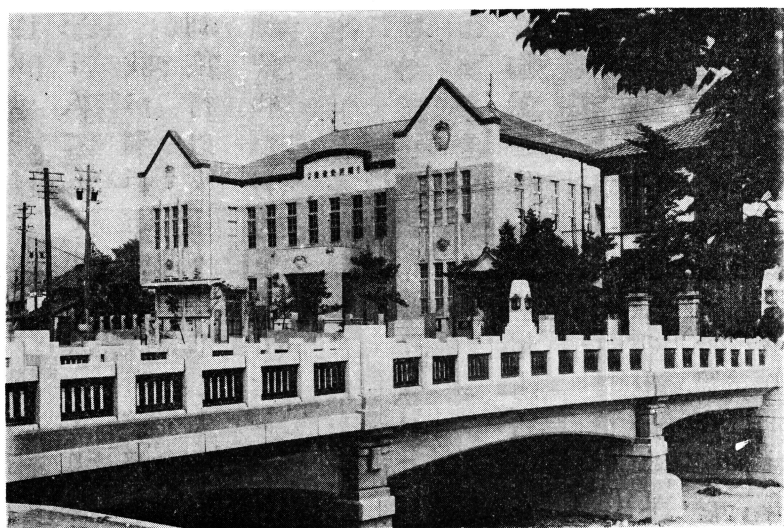
昨日降りし雪の上を、所々斑に染めて立ち上る煙は、一入あわた
しく、夜は窯の火の邊の雪を茜色に染めて、窯焼く人の影を走馬
燈のごとく雪の上に落す。

一八 瀬戸市役所

瀬戸市役所は、市の中央瀬戸川のほとりにあり。廳舎は、昭和二年の建築にかゝり、其の階上は公會堂として一般公會の用に供せらる。

市役所の中には庶務・學務・戶籍・兵事・衛生・稅務・會計・土木・營繕・都市計畫の各課及び市金庫あり、別に東分室には、社會課・水道課、西分室には産業課あり。各課の吏員は市長の命に依り、助役收入役以下部長・課長の指揮監督に従ひ、夫々市の行政事務を分擔遂行して市民生活の幸福發展を圖る。

斯くの如くして、市が種々なる事業を遂行せんが爲には多額の



瀬戸市役所

經費を必要とし、特に教育・土木・勸業等の各部の經費は何れも市勢の進展に伴ひ累年増額せらるゝの趨勢にあり。是等の經費は市税・國庫下渡金・使用料其の他の收入を以て之に充つ。市の豫算は、毎年市長原案を製作して市會に諮り、其の議決を経て定めらる。

市會は毎年度の豫算を始め市の條例・市税・使用料等市の行政に關する一切の重要事項の議決機關にして、市長は是が議

決に基き其の實行の責に任ず。然して、現在我が市の議員定員は三十人にして、市公民中より選舉せらるゝものなり。

我が瀬戸市は特殊産業都市として年と共に發展を遂げ、先年市制施行以來益々躍進して今日の盛運を見るに至る。我等市民は總親和の努力を以て愈々本市の繁榮を期すべきなり。

一九 轆轤と鑄込

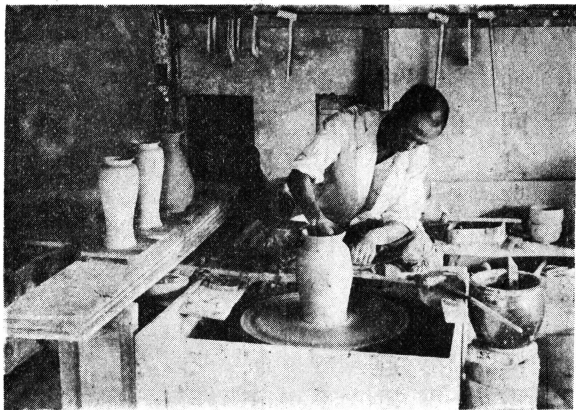
陶器を作るのに最も古くから用ひられてゐるのは手轆轤である。

其の方法は、轆轤の中央によく練つた陶土の塊を載せ、轆轤を手で廻して凡そ茶碗一個分程の土に水を着けて、こてと指とで引伸ばしながら篋で形を造り上げるのである。かうして大體形が出來

上ると、底を糸で切つて手早く別の板の上になつて干す。更に之を乾して半乾になつた時、臺にのせて外側を思ふ形に削りつつ糸底を作るのである。

此の方法は非常に熟練を要するのであるが、それだけに又陶工としての腕を振ふ事も出来るので、由來名工の作と謂はれるのは、皆この手轆轤を用ひて作り上げられたのである。

然しこの方法は、形の不揃な上に多量製産には適しないので、現在では工藝品以外にはあまり多くは用ひられなくなつてしまつた。



手 轆 轤

手で廻す手轆轤を、電力で回轉させる様に工夫したのが動力がけ轆轤である。現在瀬戸市に於て、和物といはれる内地向食器の製造には殆ど之を使用してゐる。動力轆轤は確かに製造法の一進歩ではあるが、やはり職工の技術を多分に必要とする事には變りはない。

更に一段と進歩した方法と思はれるのは機械轆轤である。これは電力で回轉する轆轤の上に、石膏型を取り付け陶土を載せ上から鋳で押へつけて、それらの茶碗の形を造りあげるのである。この方法に依れば、職工の技術もいらず、何千何萬でも寸分違はない製品を造り出す事が出来るから最も工業的である。

現在では輸出向食器はいふに及ばず、内地向食器から更に電氣用器具の製造に至るまで、あらゆる方面に汎く使用されてゐる。

其の他轆轤には足で蹴つて廻す蹴轆轤、又踏んで廻す踏轆轤

等もある。

次に鑄込は、從來の型起の發達したもので、その方法が簡單であり、然も複雑な形までも造る事が出来るので、近來は盛に用ひられる様になつた。その方法は全く石膏の吸水性を利用したもので、外型と内型との隙間へ陶土に少量の水硝子を加へて、液體に近い泥狀にしたものを上の小孔から流し込むのである。暫くして、石膏が陶土の水分を吸収した頃を見計つて型を外すと、中からすつかり形の出來上つたものが生れて來る。

又ボン抜きと言つて、型の中へ泥を一ぱい満たし、暫くして、水分が石膏に吸ひ取られて陶土が適當な厚味に固つた頃を見計つて中の泥を流し出し、次に型を外して之を取り出す仕方もある。

鑄込はこの様に便利な方法であるから、近頃は花瓶、玩具、輸出向食器類に至るまで皆この方法で製造せられる様になつて、製法上

に一大進歩をもたらしたのである。

二〇 光の中を歩む

定光寺から鹿乗へ

水野から山越に定光寺へ出る。木の芽の香高い山道を行くと鶯の聲が長閑な春の光に高くもつれて来る。落ち敷いた木の葉の上も温く湿つて、疲れた足に新しい力をつけて呉れる。

溪流の音を遠くに聞いて坂路を登りつめると、眼前がぱつと開けて定光寺山の新緑の色がくつきりと圓く大空に浮び出る。

寺に詣でて、玉野川の流に温んだ水の白く碎けるのを見、時折名知らぬ鳥の高いさへづりを聞くと、自と我が身に新しい春の力とけ込んで、我が健康に限りない歡喜と希望とが湧いて来る。

ハイキングの人波に交つて山添ひの道を鹿乗へと歩けば、白い蝶がからみとんで、麥の青さにくまどられた菜の花が、遠く霞の下にぼかされてゐる。

岩屋プール

紺碧の太空に、むく／＼と盛り上る入道雲の峯が山の峽から覗かれる。溪流の天然プールの水はあくまでも碧く、あくまでも冷い。プールは河童の群で今日も朝から騒がしい。

得意な平泳に疲れた身體を岸の岩に憇ふと、赤松の膚に啼く蟬の音が、近くでひびく瀧の音と共に快い眠氣さへ誘つてくれる。街の雑沓もどすぐろい煤煙も、今日は全く忘れて泳いで休み、休んでは泳ぐ。

歸路につくと品野の坂の上から、我が市の夜姿が點々とした灯

影にまたゝいてゐる。

猿投のキャンプ

山路からの坂路は相當に足にこたへる。背の雜囊が肩にめりこんではふり出したくなる。

入道雲が赤々と西空を染める頃やつと頂上につく。

尾張一國の風を集めたかと思ふ程の涼しさが身に泌みて、全身の汗が一時にすつとひいてしまふ。

峠を少し下りてキャンプを張る。西の宮の檜林の下にかけこんで枯枝を集めて来る。

赤々とキャンプファイアーが燃えだすと、炊事班の人達が溪流から飯盒をさげて歸つて来る。

夕闇迫る大空の下に、友達の顔が火に赤々とかゞやいて飯盒か

らは白い泡が盛にふき上る。

食事を終へて再び頂上に立つと、尾張平原の夜空の下に暑さにあへぐ里人の灯が瞳の奥へ迫つて来る。

話す聲歌ふ聲も次第に疲れて、急に山の夜風が身に泌みる。

燃え細るキャンプファイアーに薪を添へ、疲れた身體を毛布にくるませて眠につくと、溪流の音に交つて名も知らぬ鳥の聲がけたゝましくひびく。

キャンプをもれる月の美しさ。今宵は猿の啼聲をきくかも知れぬ。

森 林 公 園

ボートは岸を離れた。慣れぬ手先に牛の様な歩みでボートが進む。オールの操作もどうやら一人前になつて、スピードが出る

様になつたと思ふ間もなく、後からせまつたボートの波のあふりに舟がゆれる。自分の身體までもふら／＼とよろめく。齒を喰ひしばつて漕ぎ出すと、陽にやけた少女のしなやかな腕かひなが甲斐甲斐しうオールに働いて、後から又もこぎぬけて、數艇身のへだたりをつけてすい／＼とすべつて行く。

汗にまみれ、腰骨も碎ける程にこぎにこげば、オールも次第に心に委せてまんざら見捨てられぬ腕前になる。

艇を休めて池の真中に立つと、美しい水底に白い雲が遠く映つてゐる。東谷山の秀嶺も姿を水に落す程に目近に見える。コースを逆に出發場へつく頃には、僅かなこの練習でも立派にボートを岸へ横づけにして、天晴れな舵手の腕の牙えも誇らかに岸へ下り立つ。

二二 御野立所と萩御殿

昭和二年十一月十六日。此の日 大元帥陛下には御愛馬吹雪に召させられ、未明から沿道に奉迎し奉る近郷近在の民草の赤誠にこたへさせ給ひつゝ、三郷驛から高根山の大演習統監部へ錦旗を御進め遊ばされた。

高根山の麓に御馬を駐めさせられ、陛下には急坂に玉歩を運ばせ給ひ、山上の統監部に於て終日山野に機動する精銳の有様を望遠鏡御片手に御統監。幕僚將校の戦況報告を一々御熱心にお聴取り遊ばされた。

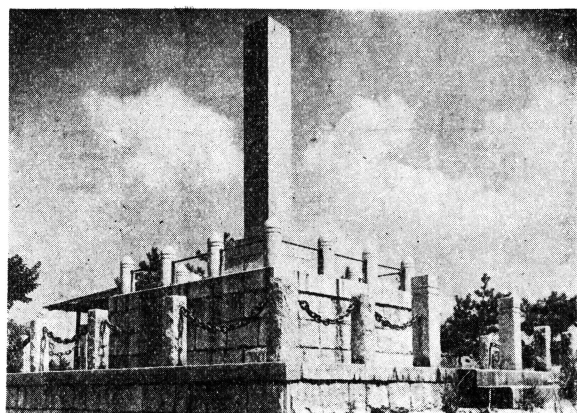
此の日、秩父宮殿下には一中隊長として親しく御参戦になり、高松宮殿下にも統監部員として高根山に御成り遊ばされた。

戦闘は市の西南部から旭村一帯に亘り、豊にみのつた稻波の間には劔の光帽の影、物凄機銃の響、行きかふ軍馬の嘶き、空には陸軍機の爆音轟き、喊聲は猿投の山脈^{やまなみ}にも響けとばかり壯烈なる遭遇戦が展開された。

休戦ラツパが高々と鳴りひびいて戦は終つた。

高根の山が秋の夕日に赤々と燃える頃、陛下には御下山し給ひ天機いとも麗はしく名古屋の行在所へ御還幸遊ばされた。

今高根山に登つて其の記念碑を仰ぐ時、其の日の御有様が胸に浮び、郷土の光榮がひしくと身に泌み



御野立所

て来る。

此の外市内の御聖蹟として忘れることの出来ぬのは萩御殿である。

明治四十三年十一月、大正天皇がまだ東宮であらせられた頃此の地に行啓遊ばされ、茨街道から萩御殿に御成りになり、當時やうやく其の成果を認められるやうになつた砂防工事の實狀を御覽遊ばされた由緒ゆいしょある阿屋あづまやこそこの萩御殿である。

今も秋には萩の花が美しく咲きみだれ、御手植の松もすく／＼とのびて、無上の光榮を物語つてゐる。

二二 陶磁器館

今日は十一月三日。菊薫る明治の佳節である。参考館では、磁

祖民吉翁の遺作品展覽會が開かれてゐるので、學校の拜賀式をすましてから參觀に出掛けた。

館内では當地現代の名工といはれる人達や、他地方から來られた好事家らしい人々が、多くの逸品傑作に驚嘆の目を瞠りながらしきりに見入つて居られた。

先づ、最も人目を引くのは何と言つても翁が晩年の力作といはれる青磁七寶刻文透染付波龍繪花瓶で、外側の青磁の色合といひ、中の筒の染付といひ、實に見事な出來榮えである。之は嘗て大正天皇が東宮であらせられた頃、當地へ行啓の砌、御休憩所の裝飾に供せられた光榮の品で、今は本市の所有となつてゐる。其の外翁一代の傑作といはれる花瓶を始め、水差其の他の茶器・家具等數々の珍品名器が陳列せられてゐるのを見ては、流石に當地の窯業中興の祖たる翁の遺された足跡の偉大さを讃嘆せずには居ら

れない。

こゝには、磁祖の遺作の外陶祖春慶翁の作品で國寶級といはれる茶盃ちやわんが藏されてゐるのを始めとして、古瀬戸・黄瀬戸の名作や、志野焼・織部焼・御深井焼等我が陶都の歴史を物語るべき代表的作品、或は徳川末期から明治時代にかけての手法の精妙を誇る逸品等貴重な参考品が陳列せられてゐる。

轉じて陳列館に入れば、こゝは又面目一變して市内現在の



部 内 館 器 磁 陶

作家或は業者から出品せられた内地向及び輸出向のあらゆる製品が目もあやに階上階下所狭いまでに竝べられてゐる。透き通るやうに眞白な生地に、或は青に赤に緑に、或は茶に紫に彩色美しく焼成せられた磁器、或は又黄に黒に茶に、釉薬の高雅、形の滋味等實に得も言はれぬ感じのする陶器、さては最近研究が進んだ各種の代用陶磁器等總べての部門にわたつて、本市現在の窯業界の全貌をうかゞふに十分である。

私は今日の此の佳い日に、仰いで先人父祖の功業を偲び、俯しては現代業界の大勢をうかゞひ、そゞろに感慨深いものがあつた。午後には磁祖の銅像の除幕式が舉げられる。私は更に感激を新にして窯神山へと路を急いだ。

二三 赤 津 焼

千利休に依つて大成せられた日本茶道が、公卿大名の社交的儀禮の具にまで發達して、其の用具に逸品・名器を競ふ様になつて、瀬戸の陶器にも藝術味豊かなものが需められ、唐宋から渡來したものに對して遜色のないものゝ焼成にと種々の苦心が拂はれた。

今日主に赤津方面に生産されてゐる織部・志野・御深井などの製品は、皆かうした茶道の發達から、各流派の宗匠に推奨せられて、世に名聲を博するやうになつたのである。

現在趣味の陶器として赤津物の名で世に其の藝術味を買はれてゐる織部焼も、元は宗匠古田織部正重然が、天正年間此の地の工

人に命じて一種獨特の茶器を作らせたのに始まり、これが後世になつて陶器の一種の風格になり、こゝに所謂織部風が生れたのである。

織部焼は、青緑又は黒の釉を施して、素朴な繪が描かれたり、青釉を一面に流して白い菊花を拔出したものなどが多い。又素地を布で押へて布目の跡のはつきり出されてゐるのもあつて何れも雅致に富んでゐる。

織部焼の製作にもしばしば消長はあつたが、幕末の頃春岱の出るに及んで、美濃風を取り入れた獨特の手法に依つて、一種の氣品と雅趣に富む作品を作り上げた。こゝに今の赤津焼の中興の氣運がもたらされて、その風趣に世の愛玩を得て現在に及んだのである。

この外、志野焼として其の名を知られてゐる志野釉も、足利義政

の臣志野宗信が、文明年間瀬戸の工人に命じて作らせたものだと
言ひ傳へられてゐる志野流茶道、香道の用器としての茶碗・水差・香
爐等であつた。

その作品には、白釉が厚く施されて表面に龜裂があり、釉下に鐵
で簡単な文様が施された繪志野や無地志野等がある。いづれに
しても鐵分が酸化して赤くなつたものが喜ばれ、又別に「ねずみ志
野」と稱せられるものもある。

又今も其の手法が應用されてゐる御深井おふけい釉も、寛永年間尾張侯
徳川義直が、瀬戸の陶工を名古屋城内に呼んで、城内御深井丸で祖
母懷土を用ひて茶器を焼かせたことに始まり、後天保年間徳川齊
莊おさの奨励からお庭焼として發達したものである。

作品は品質緻密上品で、茶道の上には大いに珍重せられるので
ある。

郷土の生産品として名高い赤津焼の發達は、斯のやうに茶道興隆の賜といふべきであり、各派宗匠の苦心も亦忘れてはならぬ一事である。

二四 瀬戸の一日

○

紫の雲を破つて今日も猿投山に眞紅な太陽が朗に登る。

立ち並ぶ藁を渡る朝風に窯の煙がなごやかな影を走らせて、高い丘の方へ靜かに消えて行く。

ボウーと、長い尾を引いて鳴る時報機に、朝の靜けさは忽ち破られて町は次第に賑かになつて来る。

夜の内に幾分澄んだ瀬戸川も、工場から流し出す水にもうすつ

かり濁つて、眞白く流れる。

工場へ急ぐ人々が街路樹の下を力強い足取りで通る。電車の着く度に夥しい人々が吐き出されて、靴音も高く夫々の職場へと向ふ。

すれ違ひに石炭を積んだトラックが走る。陶土を運ぶ馬車や手車が、野菜賣や花賣の聲に交つて勢よく通りすぎる。

山程も荷物を積んだ貨物自動車が、けたましい警笛のひびきを残して走つて行く。

街々の工場ではもう機械にスキツチが入れられる。

物凄い唸りをたてゝベルトが流れる。

張り切つた車輪のひびきが朝空に快くひびく。

窯場の煙突からは全速力で走る戦艦の様に、煙がむくくと吐き出される。

石炭を割る音、轟々と音たてゝ燃え上る焰。

火に灼けて働く人の膚は赤銅色にかゞやいて、全身に汗と脂がにちんでゐる。

焼き上げた窯は、まだほてりのひかぬ内にもう窯出しが始まる。

匣鉢をたゞく音、製品を取り出す音。

窯場は白磁の山で美しく彩られる。

町は次第に煙におほはれて、日の光さへ灰色に濁つて来る。

街を行きかふ人や車は刻々に其の數を増して来るばかり。

あはたゞしい騒音のひゞかふ中には、はてしなく伸びる町の足取りは、たのもししい躍進の姿を見せて、歩一步一步と高調へ導かれて行く。

○

火の見櫓に火が點々とまたゞき出すと、町を取りかこんだ山々

には、美しく火影がかゞやいて、町になごやかな夜が訪れる。

十字街頭に立てば、夜店の燈に社の雪洞が美しく浮んで、雑沓する人々の上には星の影さへはつきりと眺められる。

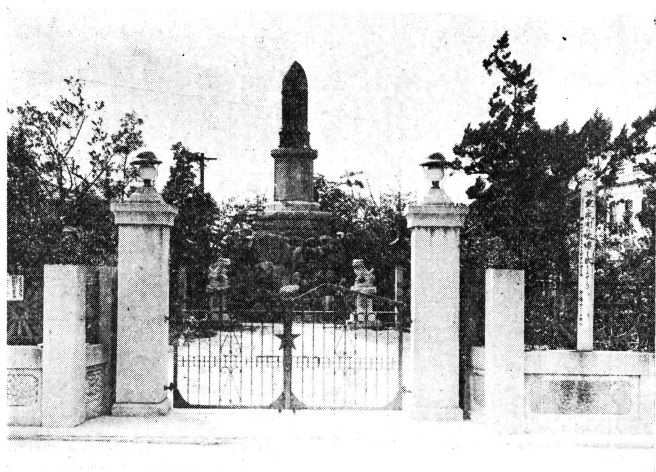
夜も次第に更けて、行き交ふ人の影も疎になる頃には、町は漸く静けさをとりもどして、時折は犬の遠吠さへ聞える。

小高い丘が急にぱつと明るくなる。

夜空に暗い山背の窯の焚口に、仁王の様な人影が焰にてらされて火をたきつぐ逞しい姿が、浮彫の様なにかゞいてゐる。煙突からは眞赤な火焰が大空に火の箭の様に燃えさかつて、飛び散る火花は煙火の様に闇にひろがつては消えて行く。

光に満ちた陶都は、夜も晝も全く休息を知らぬ様に、立ち上る煙と焰に護られて、潑刺として輝く意氣に燃え乍ら、日毎夜毎に力強く不斷の活動をつゞけて行く。

二五 忠魂碑



忠魂碑

一

國の富をもつくるてふ
名に負ふ瀬戸の市中まちに
櫻若木に包まれて
屹きつ然立てり忠魂碑

二

日清役を始めとし
聖戦こゝにいくそたび
護國の華と散りましゝ
英靈祀る忠魂碑

三

右手に振ひし破邪の劔

左手に高し日章旗

興亞不朽の人柱

勳輝く忠魂碑

四

神代このかた武に誇る

日本男兒の鑑にて

萬代不滅の光ぞと

譽は高し忠魂碑

五

仰ぐ忠靈彌高く

五萬市民の朝夕に

國の鎮めと虔みて

かしこみまつる忠魂碑

二六 瀬戸市の教育

我が瀬戸市には、縣立の愛知縣窯業學校、愛知縣瀬戸高等女學校を始め、六の小學校並に青年學校があり、其の他私立の幼稚園等がある。

學校
 陶原尋常高等小
 明治六年九月
 十二日創立
 同日
 同二十五年十
 月一日瀬戸尋
 常小學校と改
 稱
 同三十六年四
 月一尋常小學校
 同四十二年四
 月一尋常小學校
 同四十六年十
 月一尋常小學校
 大正十四年十
 月一尋常小學校
 陶原尋常高等
 小學校と改稱
 深川尋常小學校
 明治三十六年
 四月一日創立
 開始瀬戸第二
 尋常小學校と
 稱し、大正十
 四年十月十六
 日瀬戸深川尋
 常小學校と改
 稱
 祖母懷尋常小
 學校
 大正五年四月
 四日創立
 瀬戸第三尋常
 小學校と稱し
 大正十四年十
 月十六日瀬戸
 祖母懷尋常小

抑々我が瀬戸市が、明治初年春日井郡瀬戸村として、我が國黨業の本場とは言へまだ山間の一村落到過ぎなかつた頃から、今日までの小學校の發達沿革史は、即ち本市の發展向上史とも見られて實に興味深いものがある。

明治五年、我が國に初めて學制が布かれるや、同六年九月寶泉寺を假用して陶原學校の門標を掲げた一小學校が生れた。之が本市に於ける小學校の誕生である。さうして、瀬戸が村から町へ町から市へと發展の一路を辿る間に、兒童數は著しく増加し小學校も次第に其の數を増したのである。

陶原學校は、其の後瀬戸尋常小學校と改稱せられたが、後そこから深川尋常小學校が分立し、次いで、祖母懷尋常小學校が新しく分れて出來た。大正十四年には、赤津村竝に旭村大字今及び美濃之池の合併により、東明尋常高等小學校及び效範尋常小學校を合せ

[illegible]

て學校數五を數へるに至つた。更に後年陶原尋常高等小學校から道泉尋常小學校の分立を見るに至つて、現在の六校となつたのであるが、近く又深川尋常小學校から分離して古瀬戸に一校新設せられることになつてゐる。

青年學校は、市内各小學校に附設せられてゐて六校ある。昭和聖代の青年は、職業に従事する傍ら此の青年學校に學んで、將來國民の後勁として大いに活躍すべく、其の心身の鍛鍊にいそしんでゐるのである。

窯業學校と高等女學校とは、元何れも町立として創立せられたものであるが、後設備内容共に充實して、縣に移管せられて今日に至り、一は當地方中堅産業戦士の養成に、一は女子高等普通教育の向上に、夫々重い任務を果してゐる。

國家興隆の源泉が教育にあることは今更言ふまでもない。私

明治二十八年四月一日創立
 愛知縣瀬戸高等女學校
 四月一日創立
 昭和十九年三月一日縣移管

共は益々本市教育の進歩發達に努め、小にしては一郷文化の振興に資し、大にしては邦家發展の爲に大いに寄與する所がなければならぬ。

二七 窯のいろく

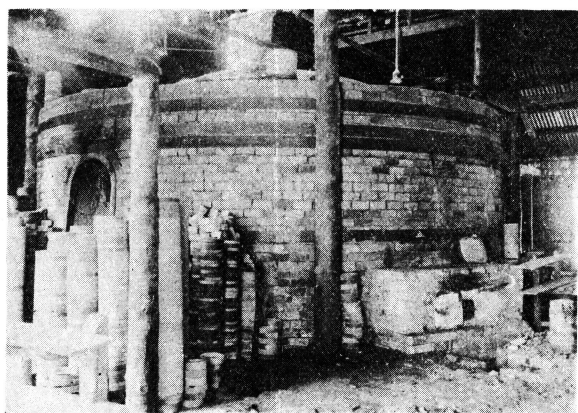
日曜日の午後、僕はお母さんの言付けて、おぢいさんの所へお使に行つた。おぢいさんもおばあさんも大層喜んで、お菓子を出したりして色々なお話をして下さつた。

やがて、おぢいさんが裏の工場の方へ窯廻りに行かれたので、僕もついて見に行つた。すると、手前の圓い形の窯の煙突からは、今焼成の最中であらう眞黒な煙をむく／＼と威勢よく吐いてゐる。

おぢいさんは窯について色々と言明をして下さった。

「今盛にたいてゐる此の窯は、燃料に石炭を用ゐるので石炭窯と言ふのだ。此の窯は温熱千三百度内外までに昇せて凡そ三十時間で焼成する。丁度今最後のせめにかゝつてゐる大事な時だよ。石炭窯にも此のやうに圓くて俗に圓窯といふのや、向ふに見える四角な形をした角窯といふのがある。角窯の方はもう焼け上つて窯起しにかゝつてゐるから中へ入つて見てごらん。」

僕が駈けて行つて入つて見ると、中はまだどかつと温い。職人



窯 圓



窯 角

たちはせつせと製品を運び出してゐる。幾段にも幾段にも高く積み上げられた匣鉢の中から白く美しく焼けた茶碗がころ／＼と現れ出るのも面白い。

おぢいさんは尙話しつゞけられる。

「此の窯は倒焰式といつてね、向ふの口から投げ込まれた石炭の火焰はずつと上の方まで昇り、再び此の匣鉢の間を逆行して来て、それ、其處の床にある穴から煙道へ抜けて行くやうになつてゐる。つまり火焰が上

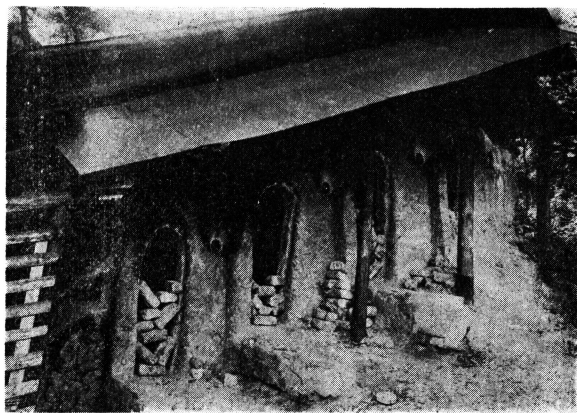
下するのだよ。」

「それはうまく考へたものですね。燃料が大變經濟的になるで

せう。」

「さうだよ。窯もだん／＼工夫せられて進歩したものだ。農等
の若かつた頃には登窯ばかりで、向ふの斜面に見えるのは其の中
の古窯といふのだ。それは皆薪材を
燃料に使つたもので、其の爲に此の瀬
戸附近の山は、殆ど木が伐り盡くされ
て禿山ばかりになつてしまつた。一
時此の附近一帯に、砂防工事が盛に施
されたのもその爲だ。それが今では
石炭窯全盛時代になつたのだ。」

それから古窯の中も見せてもらつ
たが、其の時おぢいさんは又こんな事
も聞かせて下さつた。



窯 業 本

「同じ薪材を用ゐる窯でも、此の古窯よりも傾斜が緩かで高さの割に幅が廣く部屋が大きくて、大きな磁器を焼くに適する丸窯と言ふのがある。又本業窯といふのがあるが、之は古窯を大きくしたやうなもので、陶器を焼くのに適してゐる。まだ此の外に上繪附用のトンネル窯とか電気窯などもある。」

一巡して歸ると、大分遅くなつたので早速お暇することにした。僕は今日窯に就いて色々な事を覺えて大變嬉しかつた。家路を急ぎながらふと見上げると、窯神社の社務所の赤い屋根が、夕日に映えて一際美しく輝いて見えた。

二八 古窯の話

瀬戸の窯業の起原に就いては、はつきりとした史實や記録がないので、たゞ現在地下から發掘されてゐる「掘の手物」によつて時代を推定するより外に途がない。しかし古い書物に散見されるところの僅かな記録から見て、奈良朝時代にはすでに土器としての瓦が焼かれてゐたらしく、下つて延喜時代に大嘗祭の際の御料品として、「尾張國所造」のものが用ひられたと書かれてゐるのは、恐らく此の地方の作品であつたであらう。

現今市内で發掘物が最も多いのは馬ヶ城一帯の地で、その邊には古窯が五六十以上あつたと言はれてゐる。

尤も現今その原形を止めてゐるのは、僅に品野町地内の鷹根窯

と、赤津地内にある瓶子窯等である。

瓶子窯は、かの春慶翁が宋からもたらした新様式の窯で、古代の窯が地面をくりぬいて作つた地窖式であつたのに反して、窯中には區劃があり、地上に出た半連續窯で、今の登窯の様式に近いものである。

古窯跡として時代の古いものゝ一つに菊畑窯がある。發掘されるものは、碗・皿・水瓶・耳つきつぼ・沈子・藥壺・陶丸・香爐・瓶子・佛花器が其の主なものであるが、其の年代は詳でない。此の外所謂「掘の手」として出土品の喧しくいはれてゐるのに、鎌倉時代の製品の埋没してゐる錢瓶窯・椿窯・足利時代を含む足利時代の作品の掘出される小長曾窯・烏平窯などがある。そしてそこからは小皿・碗かはらけ（椿窯附近）火鉢・大形佛花器・香爐・祖母懷壺・描鉢・天目茶碗・盃などの珍品がよく掘出される。

赤津宮裏の瓶子窯では、搗鉢・錢瓶・つぼ・茶入・小皿・花瓶・香爐・志野小皿などが掘出される。

有名な朝日窯・祖母懷・夕日窯・公園などからは、志野皿・黄瀬戸小皿・香爐・天目茶碗などが發掘される。

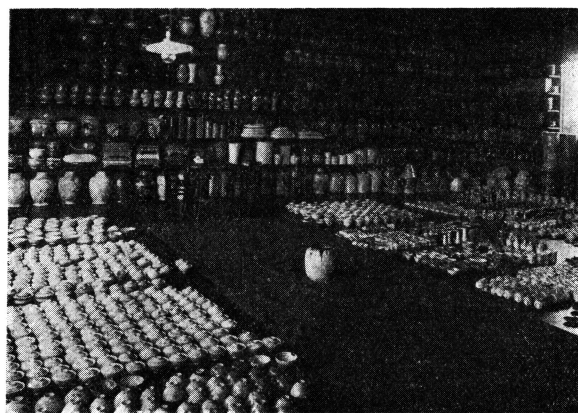
古窯の研究はこれからますますくつゞけられ、そして其の道の研究家によつて、新しい發見や考證が續々と世に發表せられることであらう。

二九 瀬戸物の瀬戸

一 瀬戸物の瀬戸

「瀬戸の瀬戸物か瀬戸物の瀬戸か、瀬戸の瀬戸物世界一。」何といふ我が陶都瀬戸の誇を如實に表現した唄であらう。陶器磁器等

を總稱して瀬戸物といひ、其の名國內にあまねく、遠く海外にも知られてゐるのは、我が瀬戸市窯業の歴史が如何に古く、其の生産が如何に盛大を極めてゐるかをよく物語るものである。



見 本 場

由來我が瀬戸地方は、窯業に關する天恵極めて豊にして、良質の原料を多く産出し、陶祖磁祖を始め幾多先人の苦心さんたん慘澹たる工夫研究と、足利・織田・徳川等諸氏の保護により、古くより斯業の發達を見たのであるが、殊に近年海外貿易隆盛となり内外の需要激増するに至り、業界各方面の革新と相俟つて飛躍的な發展を遂げ、今日の盛況を見るに至つたのである。即ち今や窯

業家一千百有餘、年産凡そ二千萬圓の巨額に上り、土焼く都日毎々の發展の姿を、大小一千の林立する煙突から立ち昇る黒煙によつて現はす此の盛觀は、眞に陶都の名に背かぬものといふべきである。

瀬戸に産する陶磁器の種類は、陶器に本業焼・硬質陶器・半磁器等があり、磁器に硬質磁器・普通磁器等がある。又別にはうろく・神酒器等の如き土器もある。尙、最近の研究として新原料による白雲陶器其の他の新製品あり、此の外時代の要求により、重要資源代用陶磁器焼成の研究考案が盛に行はれ、何れも既に着々製品化の域に進み市場に進出してゐる。次に之を用途別に見れば、飲食器・家具・裝飾品・玩具・建築用品・工業用品・衛生用品・電氣器具等種々のものがある。さうして是等の製品の販路は、我が國內は勿論廣く海外に及び、支那・滿洲・印度・印度支那を始め南洋方面から遠くは歐洲北

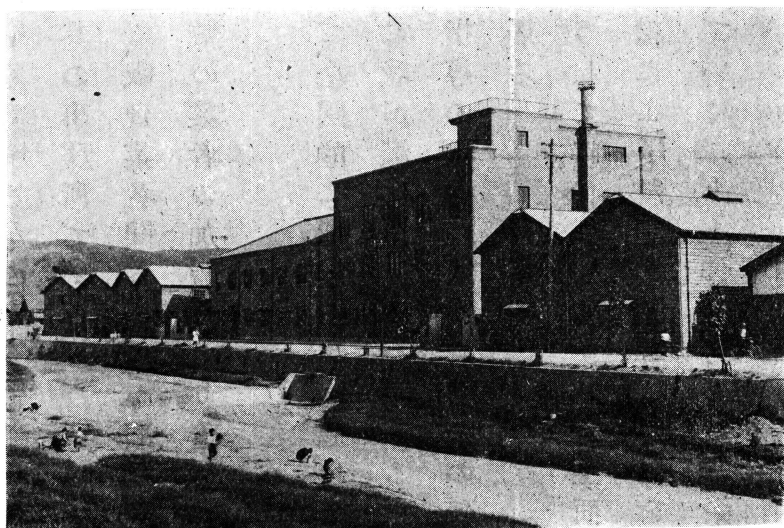
米・南米・濠洲等殆んど世界各国に限なく行き渡つてゐる。

榮ゆく工業、伸び行く陶都。我等は祖先の遺業を受けついで郷土の譽をかざしつゝ、將來益々大瀬戸の繁榮の爲に努力せねばならぬ。

二 統制組織と指導機關

我が瀬戸に於ける陶磁器産業最近の發達に關して、特に見逃すことの出来ないのは、生産並に販賣に關する組合組織の成立と、本業指導機關たる商工省陶磁器試験所瀬戸試験場の設立であらう。抑々瀬戸窯業の歴史は甚だ古く一千有餘年、幾多の變遷を経て今日に及んでゐるのであるが、近年一般産業組織の一大革新に促され、本業亦徒らに舊法になづむことを許されず、次第に新しい經營法をとり、益々健全な發達をとげて來たのである。

即ち明治十五年十月瀬戸陶磁工組が設立せられ、後瀬戸陶磁工商同業組合と改稱され、本市産業發展の基礎確立に多大の貢獻をしたのであるが、更に大正十五年に至り當業者相互間に組織と統制とを與へ、製品の改善統一、生産費の低減、販賣價格の協定等を圖り、一層其の進展を期する目的を以て、瀬戸陶磁器工業組合の設立を見るに至つたのである。陶原町の瀬戸川畔、黄色のタイルに綠色



瀬戸陶磁器工業組合事務所

の屋根、あたかも本業近年の隆昌を象徴するかのやうに、近代の建築美を誇つて聳え立つのが即ち其の事務所である。

此の生産統制組織に相呼應して、販賣業者間に於ても瀬戸陶磁器商業組合が設立せられ、市内多數の業者の加盟により着々其の所期の目的を達成してゐる。

次に瀬戸試験場は、國立であつて、全國的に斯業の改善進歩を圖る爲の研究指導機關であるが、特に我が瀬戸市を中心とする中部日本、愛知・岐阜・三重三縣下に其の指導の重點が置かれ、各種の研究が進められ業者の指導に當つて居る。

古い傳統に輝く我が郷土は、かうして時代の要求する新生面の開拓に努めつゝ、近代の産業組織により統制と指導の妙諦を發揮して、力強く世界的地歩を占めていく。あゝ、伸び行く工業、榮ゆく陶都。

三〇 榮ゆく瀬戸

土に明けゆく朝ぼらけ

廻る滑車ろくろも朗かに

沸ぎる血潮に燃ゆる窯

時代を越えて伸びてゆく

産業われに誇りあり

永き歴史を受け繼ぎて

土に生命を捧げつゝ
若き息吹をこめて焼く
空に吐き出す煙にも
希望の色と光りあり

進む文化に魁けて

工^{たくみ}藝の筆に描くとき

珠と耀く業の跡

土ある限り華と咲き

隆盛^{とほ}永久に我とあれ

國の隅々海外

船と車の往くところ

陶都の名をば轟かせ

行く手に洋し鳴る腕で

築け瀬戸市の彌榮を

— 瀬戸市歌 —

瀬戸讀本

終

昭和十四年十月十日印刷
昭和十四年十月十五日發行

瀬戸讀本

定價金三十錢

編纂者

瀬戸市大字瀬戸二〇八五番地

瀬戸市教育會編纂部

發行者

瀬戸市大字瀬戸二〇八五番地

瀬戸市教育會

代表 齋藤元夫

著作
權
所有

印刷所

名古屋市中區千種町五反田五二番地

合資社 三益社

電話中③二三〇二番

發行所

瀬戸市大字瀬戸二〇八五番地

瀬戸市教育會

電話二〇〇一番

